慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本橋街並みの特徴史考：日本橋二之部北の町
Sub Title	
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2006
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.49, No.5 (2006. 12) ,p.23- 36
JaLC DOI	
Abstract	本稿は日本橋旧区内「二之部北」のA 地区–大伝馬町２丁目，通旅籠町，通油町，B 地区–大伝馬塩町，鉄砲町，小伝馬上町，亀井町，小伝馬町１・ ２・ ３丁目について，その街並みの特徴を，江戸，明治，大正にかけての諸変化に沿って，どう変化し，またA・ B 地区，更には地区内の町の間での違いを，地価，土地所有，業種，経営規模などから分析するものである。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20061200-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第49巻第５号
2006 年 12 月

2006年８月４日掲載承認

日本橋街並みの特徴史考

――日本橋二之部北の町――

白　石　　孝

＜要　　約＞

本稿は日本橋旧区内「二之部北」のＡ地区―大伝馬町２丁目，通旅籠町，通油町，Ｂ地区―大伝馬塩町，鉄砲町，小伝馬上町，亀井町，小伝馬町１・２・３丁目について，その街並みの特徴を，江戸，明治，大正にかけての諸変化に沿って，どう変化し，またＡ・Ｂ地区，更には地区内の町の間での違いを，地価，土地所有，業種，経営規模などから分析するものである。

＜キーワード＞

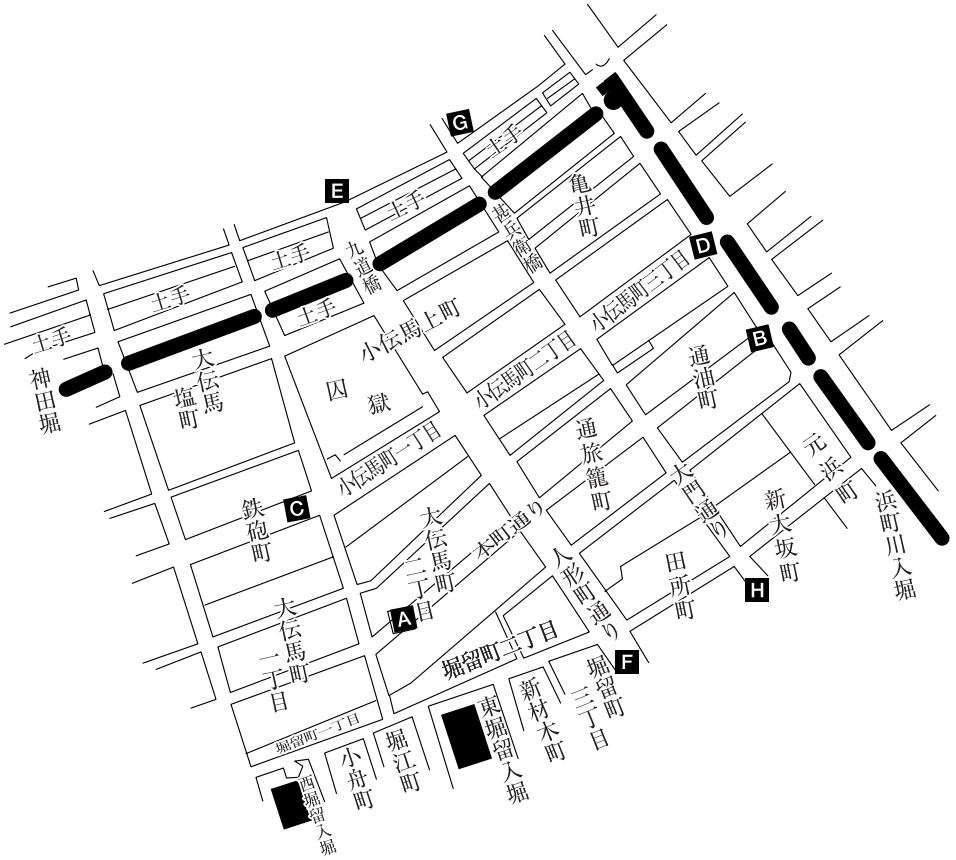
日本橋二之部北の町，本町通りと本石町通り地区，江戸市街メインストリート，江戸店持京呉服問屋，薬種問屋，伊勢木綿店，同郷同業の街，町別業種分布，大丸，三流の商業地，通りの商業価値，人形町通り，大門通り，神田八丁堀，浜町川入堀，大伝馬塩町，釘鉄銅金物問屋，水運，ロケーションの変化，織物問屋の群生化，交通の欧風化，明治11年と大正４年の地価，最高地価地点と最低地価地点，平均地価，小伝馬上町，亀井町，鉄砲町，大伝馬町２丁目，通旅籠町，通油町，市電効果，人形町の繁華街化，二之部北の各町織物問屋，織物業界の黄金時代，同業の街，問屋が問屋を生む，織物問屋の土地所有，伊勢商人，長谷川治郎兵衛，不動産投資，市場開拓と国産化のリーダー，土地所有の流動性，釘鉄銅金物店と簞笥店，洋鉄輸入，規模別分布の特徴，各地区の大店リストとその特徴

Ⅰ

本稿は，日本橋旧区内「二之部」とされた町々の中で，北の部分を対象とした「街並み商業史」である。ここでは，特に本町通り界隈（大伝馬町２丁目，通旅籠町，通油町）と，本石町通り界隈（大伝馬塩町，鉄砲町，小伝馬上町，亀井町，小伝馬町１・２・３丁目）を対比して，その江戸・明治・大正の時代の町の構造の歴史的特徴を明らかにしようと試みたものである。なお，「二之部」の南の町々，特に長谷川町・富沢町・久松町については，以前に，本誌に「町の商業的同質化」として記したことがあるので参照されたい。[1)]

1)　白石孝「町の商業的同質化」（『三田商学研究』第47巻第２号）

第１図　日本橋二之部北の町略図（嘉永）



第１図は「二之部北」の諸町のロケーションを示す略図である。

そこに４つの通りがある。AB の本町通り，CD の本石町通り（現在の江戸通り），それに EF の人形町通り，GH の大門通りである。

いうまでもなく，江戸時代には，この AB の本町通りこそ最も古い江戸市街のメインストリートであった。これに接する町に，大伝馬町２丁目，通旅籠町，通油町がある（現在の大伝馬町）。それだけに，この街並みは様々な商いの店が並ぶ繁華街であった。

もっとも，この通りは常盤橋から造成されていて，初めの部分である旧本町１・２丁目辺りは，京都の江戸店持呉服商が軒を並べ，その先の本町３・４丁目には，堺などの上方から薬種問屋が店を出し，更に大伝馬町１丁目は伊勢商人の木綿店の街であった。いわば，この辺りまでの本町通りは「同郷同業の街」であり，その主な店の進出の時期をみても，江戸市街地造成にともなって，比較的早い時代だったといえる。例えば，呉服商が華やかだったのは，すでに寛永から元禄にかけてであったし，本町３丁目を中心として薬種問屋がここに組合を発足させたのは正徳５年

第１表　文化文政期人形町・大門通り両側商業（業種一覧）

C	（小伝馬町１丁目） 婚礼道具，簞笥，長持，塗物，絵具。	E	（小伝馬町２丁目） 書物，釘鉄銅物，べっ甲細工，建具。	G	（小伝馬町３丁目） 釘鉄銅物，足袋股引，薬種，鞠沓師，葛籠，古張反古紙。 D
A	（大伝馬町２丁目） 糸・針，書物，茶，塗物，紙，煙草，薬，筆，小間物，絵具，水油，扇，煙管，醤油，線香。	人形町通り	（通旅籠町） 糸、白粉，針，書物，茶，繰綿，紙，釘鉄銅物，下り傘，煙草，草履，扇，蠟燭，真綿，武具，べつ甲櫛，呉服。	大門通り	（通油町） 糸，針，書物，べっ甲櫛，竹皮，白粉，紅，茶，釘鉄銅物，合羽装束，煙草入，蠟燭，打物，筆，呉服，小間物，煙管，人形，木綿，綿着，仏具，鼻紙，馬具武具。 B
	（堀留町２丁目） 釘鉄銅物，合羽装束，煙草，畳表，打物，瀬戸物，雪踏。 （新材木町）（新乗物町） 綿打道具，紙，書物，乗物師。 （葺屋町）（堺町） 芝居街		（田所町） 白粉歯磨，紙，薬種，古手，水油。 （長谷川町） 呉服織物，紅，額，菓子。 （新和泉町） 薬種，絵具，べっ甲櫛。		（新大坂町） 釘鉄銅物，古手，べっ甲櫛。 （元浜町） 合羽装束，古手，呉服，明樽。 （富沢町） 足袋股引，古手，呉服織物。
		F		H	

文化文政：「十組問屋便覧」「江戸買物独案内」より作成。
白石孝『日本橋街並み繁昌史』p.210

（1715年）で，享保の頃には，その問屋数は25軒にも達していた。また，大伝馬町１丁目の木綿問屋にしても，貞享３年（1680年）にはすでに74軒を数える。[2)]

これに対して，同じ本町通りでも，大伝馬町２丁目以東の街の様相は異っていた。

第１表はこの「二之部北」の界隈の文化文政期における商いの町別業種分布である。もちろん，これが全てではないにしろ，そこには，江戸文化の成熟期における生活文化財が，この本町通りの３つの町の商いに網羅されていることが示されている。そして，ここでの主な店をみると，大伝馬町１丁目までの街とは異なり，様々な地方から江戸に出て来て開業したもの，あるいは出店したものが多く，その時期も，江戸中期以降である。いわば，この街並みは，江戸の発展，消費拡大に照応して形成されていったものといえる。事実，この界隈のシンボル的存在となった通旅籠町の大丸江戸店も，京都よりここに出店したのは寛保３年（1743年）のことであり，[3)] また，通油町などに多くみられた釘鉄銅問屋も，最盛期はやはり文化文政の頃であった。

しかし，この界隈のうち，小伝馬町や堀留町２丁目，田所町，新大坂町など南のいわゆる人形町通り両側の町々は，表のように，まだみるべき店も少く，三流の商業地といってよかった。このことは，江戸時代における人形町通りの商業価値を考える上で重要なことである。事実，江戸

2)　白石孝『日本橋街並み繁昌史』pp.122-123
3)　前掲書 p.211，『大丸250年史』p.47

時代には，今の人形町交差点辺りから南は大名屋敷地であったし，道幅も狭く，いわば本町通りからの横道で，筆者が度々いうように，それは葺屋町や堺町の「芝居町への通い道」の如き姿ではなかったか。その上，第１図のように，この通りの北は，あまり指摘する文献がないが，竜閑川堀の九道橋を渡った先のＥ点でゆき止まりになっていたのであった。

南北の通りのもう１つは，GH に示される「大門通り」で，これは，明暦の大火まで，この南の一劃にあった旧吉原の大門への道でこの史蹟を名として残したものだが，江戸時代には，図のように，Ｇ点で更に北に延び，神田川の和泉橋際に達し，その先の奥州街道に結ばれる通りであった。この意味からすると，この時代には，ゆき止まりの人形町通りよりも，大門通りの方が，より商業価値があったことになる。

この界隈の今一つの特徴は，図のように，北に神田堀，東に浜町川という入堀に囲まれていたということである。

北の神田堀は，明暦の大火後に，天和年中（1681－83年）に防火のために開かれた堀で，一名「神田八丁堀」とよばれ，安政５年に一時埋められたが，明治11年再び開削され竜閑川といわれたものである。そして，この入堀は東の浜町川堀と亀井町のところで結ばれ，この界隈に水運の便を供するものとして注目される。事実，図の大伝馬塩町という町名にも示されるように，この河岸には塩物の陸揚げがなされたといわれ，また，通油町に釘鉄銅問屋が多くみられたのも，この水運の利用にほかならない。もっとも，この入堀のもつ水運の具体的な役割については，前稿にも触れたように[4]，詳らかではない。それに，この入堀は小伝馬町三丁目辺りの汐見橋まで海からの汐が差しのぼり水運に利するというものの，人家の汚水の吐け口もあって，土砂や芥が埋まり，川浚いをしないと舟の運行が困難だったとさえいわれる[5]。従って，ここでは，この入堀は，町のロケーションにとり，表通りと同様な商業価値をもつものであったと推定するにとどめたい。

こうした，この界隈の町々のロケーション上の様相は，もちろん，明治期に大きく変化してゆく。

その第１は，前述したような人形町通りの南の武家屋敷の消失と，そこにおける水天宮や米穀取引所を新に抱えた繁華街人形町の誕生，それに，江戸時代には渡し船でしかなかった小網町と茅場町との間が鎧橋により結ばれたという変化である。これは人形町通りのもつ商業価値を一変するものであったといってよかろう。

第２は，すでに筆者が本誌別稿で詳述したように[6]，人形町通りの堀留町界隈を中心とする織物問屋の群生化である。これは明治20年代に顕在化するが，それは人形町通りだけでなく大門通りの商業価値をも大きく変えるものであった。そして，この織物問屋の群生化は通旅籠町や通油町にも及び，本町通りの街並みをも一変させることとなる。

第３は，明治期における交通の欧風化である，明治10年に，浅草―新橋―品川の無軌道乗合馬車（円太郎馬車）が走ったことに始まり，明治15年になると馬車鉄道が，新橋―日本橋，日本橋

4）　白石孝　1）論文 p.98
5）『東京市史稿』（覇都時代の港湾）p.389
6）　白石孝「織物問屋群生の史的背景と特徴――明治･大正期の人形町界隈」（『三田商学研究』第46巻第２号）

―上野間，上野―浅草間，浅草―新橋間に敷設され，更に，明治37年には，銀町―小伝馬町―浅草橋―浅草雷門に電車が走るに至る。[7)]

馬車鉄道の時代には，本町通りと本石町通りに運行されていたが，電車時代に入ると，上記のようなルートで，本石町通りだけになり，ここに江戸時代からのメインストリートの本町通りは，その地位をこれに奪われることとなる。

更に，明治末年には人形町通りにも市電が通り，人形町―堀留町３丁目―小伝馬町―神田松板町―和泉橋―御徒町の路線が敷かれた，これはそれまで竜閑川入堀を渡った辺りでゆき止まりになっていた人形町通りの姿を変貌させるものであった。

II

それでは，江戸の姿を残している明治前期において，この「二之部北」の本町通り界隈と本石町通り界隈の町とでは，街並みにどのような特徴的差異がみられようか。

本町通り界隈の方をＡ地区，本石町通り界隈の方をＢ地区として，それぞれの町の地価をみたのが第２表である。

地価は取引繁栄の実際的指標とみなされるが，そこには，町々のロケーションからの商業価値を表示しているといえる。

まず，そこには各町の地価の最高地点と最低地点及び町毎の平均地価を記しておいた。

これによると，明らかに，Ａ地区とＢ地区では最高地価，平均地価でも格差があり，いかに本町通り（A）の方が商業価値が高いかが示されている。もちろん，この本町通りのそれは「二之部南」の近隣の町々と比較しても，東堀留河岸の町を除いて，やはり群をぬいていた。事実，平均地価で，本町通りの３つの町をみると979円～1,110円であるのに対し，田所町では689円，元浜町839円，新大坂町723円，弥生町では532円であったからである。それにしても，Ｂ地区の町々の平均地価は，表のように，364円～617円で，上記の南の町々以下であり，いかに本石町通り両側やこれ以外の町々が低評価されていたかがうかがえる。それは特に大伝馬塩町，小伝馬上町，亀井町が一段と低くみられていた結果でもある。

それでは本町通りＡ地区と本石町通りＢ地区の各町の最高地価地点はどのようなところであったろうか。

大伝馬町２丁目1,464円の地点は，表の備考欄にあるように，14番地で，本町通りの人形町通り角，また通旅籠町の1,464円のところは１番地で，これと同様の地点であり，通油町では1,510円という最高地価の場所は18番地で，本町通りの大門通り角であった。

Ｂ地区では最高地価は上記の地区のそれに対して57～65％程度のものだが，その点はやはり人形町通りか大門通り角地であった。

他方，最低地価地点をみると，Ａ地区では各町とも本通りの裏にあたるところで，最高地価

7）『東京都交通局40年史』p.10

第２表　明治11年地価（百坪当）

（A）地区　　単位円（円以下切捨）

町名	最高	備考	最低	備考	平均
大伝馬町２丁目	1,464	14番地 本町通りの人形町通り角	407	31,32番地 本町通り北裏通り	998
通旅籠町	1,464	１番地 上記と同じ	473	20,21番地 本町通り南裏通り	979
通油町	1,510	18番地 本町通り大門通り角	605	22～25番地 大門通り本町通り南裏	1,110

（B）地区

	最高	備考	最低	備考	平均
大伝馬塩町	605	12番地 角地	265	15,16番地 横道	364
鉄砲町	720	15,24番地 角地	517	16～23番地 本石町通り南面	580
小伝馬上町	587	10番地 大門通り	282	３～９番地 横道	368
小伝馬町１丁目	771	８番地 本石町通り人形町通り角	519	２～７番地 本石町通り南面	583
〃　　２丁目	846	8,9番地 上記と同じ	535	２～７番地 上記に同じ	612
亀井町	899	35番地 大門通り角	309	21～25 河岸	414
小伝馬町３丁目	984	21番地 大門通り角	605	19,20番地 本石町通り南面片側	617

資料　明治11年「東京地所明細」による。

と対比して，大伝馬町２丁目では27％，通旅籠町では32％，通油町では40％の低さであった。これはかなりの格差である。そして，それは本町通りとその裏通りとの格差を表わすものとして注目される。B 地区では，小伝馬町１・２丁目のように，本石町通りに面していても，それが地価を左右する決定的要素ではなく，８・９番地のような人形町通り角は高く，そうでない南面の２～７番地は延べて一律に低価格という様相を示している。それだけに，最低価格の最高地価格差は60～70％程度にしかすぎない。

こうした「二之部北」の界隈の町々の地価は，すでに述べたような明治期中期以降の諸変化により，どのように変っていったであろうか。これを示したのが，大正４年の第３表である。

まず，A 地区と B 地区の最高地価の格差は変りない。依然，本町通り界隈の町々の方が商業価値が高いが，前表の明治前期と比較すると，平均地価では，小伝馬町のそれが，かなり上昇しているし，最低地価の水準では，むしろ A 地区の本町通りの町々を上廻っている。それは市電が本石町通りを走るようになったことによるこの町々の商業価値の上昇を示すものにほかならない。いわば市電効果によるものだが，これと同様なことが人形町通りの価値にも現われており，本町通りの大伝馬町２丁目や通旅籠町の最高地価地点をみると，明治前期の第２表と比べて，人

第 3 表　大正 4 年地価（百坪当）単位円

（A）地区　（円以下切捨）

	最高	備考	最低	備考	平均
大伝馬町 2 丁目	5,600	13,14番地 本町通り人形町通角	2,300	26番地 小伝馬町 1 丁目南裏	3,844
通旅籠町	5,400	1,7,8,14番地 人形町通り大門通り角	2,600	20,21番地 本町通り南裏通り	3,909
通油町	5,200	1.18番地 本町通り大門通り角	2,800	22～25番地 大門通り本町通り南裏	4,202

（B）地区

	最高	備考	最低	備考	平均
大伝馬塩町	2,500	12番地 角地	1,600	17番地 樋道	1,985
鉄砲町	3,850	25番地 角地	2,300	2 番地 上記と同じ	3,052
小伝馬上町	3,200	2 番地 人形町通り	1,600	12番地 神田堀河岸	1,631
小伝馬町 1 丁目	3,550	8 番地 本石町通り人形町通り角	3,200	2 ～ 7 番地 本石町通り南面	3,272
〃　2 丁目	3,550	1,8番地 人形町通り大門通り角	3,000	3 番地 上記に同じ	3,218
亀井町	2,500	1,9番地 大門通り浜町川河岸	1,750	21～25番地 神田堀河岸	1,841
小伝馬町 3 丁目	3,400	14,21番地 浜町川側・大門通り角	2,700	22番地 本石通り裏側横通	3,772

資料　『日本橋区史』所載の「各町土地台帳」による。

形町通り側にその範囲をひろげている。また，これも明治中期以降の大きな環境の変化である人形町の繁華街化や「二之部南」の堀留町界隈の織物問屋群生化によって，大門通りの角地の価値も高まったことが示されている。

しかし，その結果，同じ B 地区でも，大伝馬塩町，小伝馬町上町，亀井町などとは，鉄砲町や小伝馬町のような市電通りに面した町々とでは，地価の上でも著しく格差を生ずることとなる。

それではすでにこの時期には織物問屋が群生した南に隣接した町々との地価の差はどうなったろうか。本町通りの町々（A 地区）の平均地価は3,844円～4,202円に対して，田所町は3,976円，元浜町3,327円，新大坂町3,675円，弥生町3,333円であるから，まだ本町通り界隈の方が地価は高いが，明治前期に比べて，その格差は縮少傾向にある。しかし，実は，この界隈にも，後述するように，織物問屋の群生化の徴候はすでに明治30年代には顕著であった。第 4 表は明治31年におけるこの界隈の織物問屋である。大伝馬町 2 丁目に 8 店，通旅籠町に12店，通油町には実に17店であった。これに対して，B 地区では小伝馬町 1 ・ 2 丁目には 1 店ずつ， 3 丁目に 3 店で，鉄砲町に 1 店のほか大伝馬塩町，亀井町，小伝馬上町には全くない。こうしてみると，本町通り界隈（A 地区）はその南のいわゆる堀留町一帯の織物問屋街商業圏に包摂されていったものといえ

第４表　二之部北の町織物問屋（明治31年）

番地	店名	業種	税　円
大伝馬２丁目			
1	壽長　●	木綿卸	31
9	升屋中村利兵衛	金巾卸	60
11	大黒屋篠原久米吉●	木綿卸	36
12	増田善兵衛　●	呉服太物卸	41
19	松屋松永清次郎	木綿卸	19
21	平野いち	晒金巾卸	16
29	中島仙之助　●	染絹太織卸	55
30	油屋支店	呉服太物卸	181
通旅籠町			
1	榎戸平兵衛	木綿太物卸	26
4	大丸　＊	呉服	1,079
8	大黒屋浅川大次郎	木綿太物卸	19
9	河内屋横川慶七	木綿卸	20
9	犬伏猪蔵　●	太物卸	12
9	大茂大黒屋藤野茂八　●	洋織物卸	128
12	堀越勘治　●	〃	106
16	猪山亀吉	太物卸	12
17	伊勢屋疋田宗七	綿ネル卸	34
18	大坂屋芳賀吉之助●	太物卸	57
19	横田久吉	洋織物卸	34
29	丁字屋塚本善之助	金巾木綿卸	45
通油町			
1	谷田屋池田三五郎	木綿卸	19
3	松居勇次郎	〃	124
6	近江屋中井長兵衛●	呉服卸	118
6	京屋清水治兵衛	太物卸	66
6	横井鍋吉	洋織物卸	69
6	辻新兵衛　●	呉服糸卸	179
14	三河屋林伝吉	〃	43
17	美濃屋岩田藤七	呉服卸	31
17	松本直祐	呉服太物金巾卸	98
19	近江屋沢井藤助	太物卸	36
20	中村屋中村清吉	〃	34
21	足袋屋高橋新五郎	呉服太物卸	11
21	近江屋堀常吉	金巾風呂敷卸	10
21	大菱屋石田万兵衛	木綿卸	113
22	広瀬庄兵衛	金巾太物卸	84
23	殿村屋外村嘉兵衛	呉服太物卸	111
24	菊屋浅野鉄吉	太物卸	15
小伝馬町１丁目			
2	二見屋平岡久左衛門	織物仲買	67
小伝馬町２丁目			
8	柏屋石川吉兵衛	金巾太物卸	115
小伝馬町３丁目			
9	加藤直吉	呉服屋	24
19	富屋杉浦卯之吉	木綿卸	35
21	近江屋深田興三兵衛	呉服卸	74
鉄砲町			
1	山倉屋大島庄次郎	織物卸	15

資料　明治31年「日本商工営業録」より作成。
大伝馬塩町，亀井町，小伝馬町には織物問屋なし。
●は大正期まで同地に店があったもの。

る。事実，織物業界の黄金時代といわれる大正期には，この界隈の織物問屋は更に増加をたどっている。通旅籠町は大正７年，その数は前記の倍，24店にもなり，通油町では17店が20店に，大伝馬町２丁目でも８店が10店に増加するのであった。また，明治31年の頃には織物問屋が皆無だった亀井町に４店をみるが，小伝馬町１・２・３丁目の店はなくなる。まさに，本町通り界隈は「同業の街」へ変貌したといえるであろう。

こうした織物問屋群生化の背景については，別稿でも詳述したが[8]，なかでも，ここでは，この業種が織物の多様化により新市場参入が容易であったこと，主家に勤めていた者が独立開業するケースの多い業界で，まさに「問屋が問屋を生む」形[9]での増殖がみられること，それだけに，そ

8)　白石孝　6）の論文 pp.91-95
9)　白石孝『日本橋堀留東京織物問屋史考』p.42

第５表　本町通り，本石町通り界隈織物問屋土地所有（明治45年）

所有地地番	所有者	居住地
大伝馬町２丁目		
2,3	堀越角次郎	通旅籠町
4,5,6,26,27	長井九郎左衛門	三重松坂
12,17,19	長谷川治郎兵衛	〃
22,23,24	小林合名	堀留町２丁目
通旅籠町		
4,9	下村正太郎	京　　都
5,6,7	下村源蔵	〃
10	薩摩治兵衛	堀留町２丁目
13,14,15	堀越角次郎	当　　地
17,18	芳賀吉之助	〃
28,29,30	長谷川治郎兵衛	三重松坂
通油町		
4,5,13	辻つる	当　　地
15	藤野茂八	通旅籠町
24	長谷川治郎兵衛	三重松坂

所有地地番	所有者	居住地
小伝馬町１丁目		
5	長谷川治郎兵衛	三重松坂
9	杉村甚兵衛	新材木町
小伝馬町２丁目		
—	—	—
小伝馬町３丁目		
3,15	菊地長四郎	元浜町
21	西沢善七	新材木町

明治45年地籍台帳より作成。

の一方では移転や転廃業も多く，開業・進出のための店の取得・譲渡が容易であったことなどがあげられよう。

実際，明治31年時と大正７年のこの界隈の街並みをみても，確かに，前記のように，織物問屋の数は著しく増加したとしても，この間に移転や転廃業した数もかなり多い。大伝馬町２丁目の場合，８店舗中変ってしまったのが４店舗，通旅籠町では12店舗中８店舗，通油町にいたっては17店舗中15店舗も入れ替っているからである。第４表のリストに●印を付したものだけが残ったにすぎない。

しかし，この界隈にとって，明治から大正にかけての変貌で特筆すべきは，やはり，なんといっても，「大丸呉服店」の撤退ではなかったか。それは第４表の同町４番地として記してあるが，４・５・６・７番地971坪を占める群をぬく大店で，この町の江戸以来のシンボル的存在であった。これが明治になって維新不況から立直れぬまま，百貨店への脱皮に失敗し，明治末年に遂に東京からの撤退を余儀なくされたことは『明治の東京商人群像』で詳述したが，[10] その背景の中には，やはり，この界隈のこれまで述べた街並みの変化があったといえる。事実，本町通りは織物問屋街といってよい街並みになり，本石町通りと違って市電も通らぬ裏通りになったことは，それだけに，百貨店という大規模小売店としてのロケーションには適さぬものというべきであった。

このような明治期の諸変化の中で，本町通り界隈の著しい織物問屋街化の進展の時期に，これがどのように，これらの町の土地所有に現われていったかを示すものが，上記の第５表である。

10）　白石孝『明治の東京商人群像――若き創業者の知恵と挑戦――』pp.65-72

ここには，明治45年における本町通りと本石町通り界隈の土地所有者のうち，織物問屋のそれをリストアップしてある。

そこにはいくつかの特徴が見出される。

その第１は，これらの町に群生化した織物問屋の中で，土地を所有しているものは，通旅籠町では大丸の下村と丸文の堀越，大坂屋の芳賀，通油町では辻ぐらいなもので，いわば，これ以外の大部分の織物問屋は地借・店借であったことがうかがえる。

第２は，多くの土地が長井九郎左衛門，長谷川治郎兵衛のような大伝馬町１丁目の伊勢商人の木綿店主によって占められていることである。長井九郎左衛門は大伝馬町２丁目に５ヶ所，長谷川治郎兵衛はそこに１ヶ所と通旅籠町に３ヶ所，通油町に１ヶ所，それに小伝馬町１丁目にも１ヶ所の土地を所有している。もっとも長谷川治郎兵衛の事業経営で，不動産投資は，江戸時代から積極的に行われ，すでに大伝馬町２丁目の３ヶ所，通旅籠町の１ヶ所はすでに所有済であった[11]。しかし，明治末期におけるこの所有地の増加は，やはり松坂木綿の市場性の喪失[12]という時代の波の中での事業経営の一環として注目されよう。

第３の特徴は，幕末から明治の新しい時代に，織物問屋として急成長した大店の登場である。上州出身の堀越角次郎店，近江の豪商小林吟右衛門店，これから別家独立して木綿・金巾での大店となった薩摩治兵衛店，同じく堀越とタイアップして堀留辺りの洋織物モスリンの市場開拓と国産化のリーダーであった杉村甚兵衛店などである。これらはまさに明治を象徴するような存在であったといってよかろう[13]。

第４は，同じ本町通り界隈でも，大伝馬町２丁目と通旅籠町に対し，通油町の土地所有が大きく異なっているということである。この通油町には，第４表のように，明治31年にはすでに17店が，また大正７年には20店もの織物問屋が出店していったにもかかわらず，第５表のように，これらの織物問屋が土地を所有しているものが，当地では辻新兵衛が３ヶ所だけであり，町外からは通旅籠町の藤野茂八と前述の伊勢商人長谷川治郎兵衛が，それも１ヶ所しか所有していないのあった。しかも，ここでは表示しなかったが，明治９年の地籍台帳と比較してみると，明治45年には，土地所有者が殆ど入れ替っているので，これをみても，この通油町という街並みが，かなり流動性の高いものであったといえるのではなかろうか。

III

このように，A 地区の本町通り界隈の町々が織物問屋街化する明治中期以降，その街並みに様々な上記のような特徴を生み出していったが，「B 地区の本石町通り界隈の町々は」，というと，これとは全く異なる街並みを形成していった。まず，伝統的な江戸以来の商いがそれである。第６表は，明治31年の，この地区における最も特徴的な業種である釘・鉄・銅，金物類の卸業と，

11）　北原正元編著『江戸商業と伊勢店』pp.375-376, p.399
12）　後藤隆之『伊勢商人の世界』p.75
13）　白石孝　9）の論文及び『日本橋街並み商業史』第４章及び pp.173-176，pp.244-248

第 6 表　日本橋二之部北の町別 2 業種店数

町名	釘・鉄・銅,金物卸	簞笥卸
大伝馬塩町	1	0
小伝馬上町	8	0
亀井町	4	0
鉄砲町	6	1
小伝馬町 1 丁目	0	10
〃　2 丁目	11	2
〃　3 丁目	5	0
小計	35	13
大伝馬町 2 丁目	2	0
通旅籠町	2	0
通油町	9	0
小計	13	0
合計	48	13

第 4 表と同じ資料より作成。

すでに町の名物でもあった簞笥など卸・小売の町別店舗数である。

これによると，釘鉄銅金物の卸店は B 地区全体でも35店にも達し，なかでも，小伝馬上町には 8 店，小伝馬町 2 丁目には11店もあった。それにこういった店は，本町通りにも及び，通油町には 9 店もあって，いかに広く分布しているかがうかがえる。これに対して，簞笥のそれは小伝馬町 1 丁目に集中して，そこに10店を数える。これに対して A 地区の本町通りには，こうした店は一軒もない。

この界隈に広く分布した釘鉄銅金物問屋の数の増勢は，やはり明治期における洋鉄の輸入の増加によるものといえる。しかし，外国船は横浜港までしか入れず，船に積み替えられて東京湾から大川筋に入り，これから入堀河岸に運ばれていった。特に洋釘は機械生産で，鍛冶屋で作る和釘と違って寸法が正確で不揃もなく，大量に需要されるようになるが，洋樽につめられ重量がかさむので，運送には水路を利用するのが便であった。これが第 6 表における当該問屋の分布に現われているといえる。そして，小伝馬町 2 丁目には「東京鋼鉄金物問屋組合」「東京金物商組合」「東京刃物砥石問屋組合」の事務所がおかれていた。まさに，この界隈一帯はこの種の商いのセンターであった。[14)]

ここで，改めて，A 地区（本町通り界隈）と B 地区（本石町通り界隈）とを商店の規模から比較し，その特徴を描いてみたい。第 7 表は，すでにかかげた明治31年時の当該地域各町の商店規模別分布である。この場合の規模は，売上高に対する税額で，一応，これを小規模からⅠ～Ⅳの段階に区分したものである。税額でⅠは20円以下，Ⅱは21円～50円，Ⅲは51～100円，Ⅳは売上が

14）『中央区史』及び『東京金物組合史』など。なおこの界隈のこの種の門屋分布図は白石孝，前掲 2 ）の著書 p.223

第７表　明治31年当該地域各町の商店規模別分布

地区別	町名	I 20円以下	II 21～50円	III 51～100円	IV 101円以上	計（店）
A	大伝馬町２丁目	22	22	7	2	53
	通旅籠町	13	15	5	6	39
	通油町	21	23	9	10	63
B	大伝馬塩町	9	10	0	1	20
	鉄砲町	25	9	1	0	35
	小伝馬上町	19	6	1	0	26
	亀井町	15	6	1	0	22
	小伝馬町１丁目	24	7	1	0	32
	〃　２丁目	24	11	0	4	39
	〃　３丁目	22	18	4	0	44

明治31年「日本商工営業録」より作成　規模分類は本文。

多いとみられる101円以上の大店である。

これでみると，III，IVのランクの店がＡ地区の町々にはかなりあるが，Ｂ地区では極めて少い。いわば，Ｂ地区の町々の店は比較的小規模なものが多いといえるであろう。

それでは両地区でIVランクに入る大店は，どんな業種のどのような店であったろうか。次の第８表はこの大店のリストである。これによると，業種は油や煙草のようなものを除いて，まさに織物・糸・呉服と釘鉄銅金物が大半を占めており，しかも，この中には江戸以来の老舗が数軒含まれている。それは文化文政の頃の『江戸買物独案内』で所蔵されている店である。大伝馬町２丁目の升屋喜右衛（水油仲買），通旅籠町ではもちろん大丸，通油町では辻屋新兵衛（糸・呉服・蠟燭）のほか釘鉄銅打物問屋の炭屋平兵衛や炭屋湯浅七左衛門，更に小伝馬町２丁目の中嶋屋源七，越後屋七兵衛などがそれである。これをみると，織物問屋の大店に江戸以来の老舗が少いのに対し，釘鉄銅金物問屋はすでに以前からこの町に大店をかまえていたものが中心になっていたといえるであろう。それは，明治－大正の街並み形成の１つの特徴を物語るものであったといえよう。

IV

以上の史的分析からこの「二之部北」の２つの地区の町々をみると，その特徴を次のように要約することができよう。

(1)　本町通りはやはり江戸市街のメインストリートだけあって，この通りの大伝馬町２丁目，通旅籠町，通油町の街並みは，その周辺の町々に比して，格段の繁栄度をもっていた。しかし，大伝馬町２丁目までのこの通りの西の部分が，江戸市街形成の初期から同郷同業の街として早くから発展したのに対し，ここで取り上げる地域は，江戸の消費が拡大していってから遅れて発展していった街並みといわなくてはならない。

第 8 表　A・B 地区各町のⅣランク大店

A地区	大伝馬 2 丁目	⑦升屋長谷部喜右衛門（油卸小）	143円
		㉚油屋支店向山小平次（呉服太物卸）	181
	通旅籠町	④大丸下村正太郎（呉服・糸卸小）	1079
		⑧溜屋鶴岡庄七（煙草卸小）	123
		⑨大茂大黒屋藤野茂八（洋織物卸）	128
		⑫堀越勘治（洋織物卸）	106
		⑲紀伊国屋浅井半七（銅鉄卸）	328
		㉛大畑多右衛門（紙卸）	119
	通油町	②近江屋藤掛興左衛門（絹綿糸卸）	104
		②小泉合資小泉平吉（太物卸）	124
		⑥辻新兵衛（呉服・糸卸）	179
		⑥近江屋中井長兵衛（呉服卸）	118
		⑦角屋杉村平兵衛（金物卸）	100
		⑦製紐（株）（紐生産）	258
		⑩炭屋湯浅七左衛門（金物卸）	397
		⑪大和屋小林藤兵衛（袋物皮革卸）	143
		㉑大菱屋石田万兵衛（木綿卸）	113
		㉓殿村屋外村嘉兵衛（呉服木綿卸）	111
B地区	大伝馬塩町	⑫日本運輸（株）（運送）	177
	小伝馬町 2 丁目	⑧越後屋桑原七兵衛（鉄物卸小）	174
		⑧柏屋石川吉兵衛（金巾太物卸）	115
		⑯銅屋森田宗次郎（銅鉄卸小）	206
		⑯中島屋中尾金八（銅鉄卸）	135

資料　第 7 表と同じ。○数字は番地，数字は年税額，円以下切捨。

⑵　この商業の繁栄に係わりをもつ通りの商業価値をみると，江戸時代では，人形町通りのそれは低く，むしろ大門通りの方が大であった。

⑶　しかし，明治になって，この界隈の商業上の背景は大きく変化をみせる。（イ）人形町繁華街の出現，（ロ）人形町通り両側での織物問屋群生化，（ハ）人形町通りと本石町通りにおける市電の開通である。

⑷　これらの背景に，この界隈の特徴の変化をみるが，まず，商業取引の繁栄度の指標となる地価について，明治11年と大正 4 年の変化を考察し，A 地区と B 地区との格差の実態が明らかにされる。

⑸　織物問屋群生化について，明治31年と大正 7 年についてみると，ここにもこの現象は顕著であるが，明治45年についての土地所有から，（イ）ここに新に進出した問屋の大部分は地借か店借であること，（ロ）松坂木綿の市場喪失をむかえた伊勢木綿店が新に不動産投資者として出現をみせたこと，（ハ）急成長した織物問屋の中に，通旅籠町には，市場開拓と国産化へのリーダー的業者が出現したこと，（ニ）土地所有からみると，通旅籠町と違い通油町では織物問屋の

土地が少く，この点で流動性は高いという特徴がみうけられる。

⑹ 最後に織物問屋と同様に，この界隈に多い業種は釘鉄銅金物問屋で，織物の洋反物輸入に類似して洋鉄の転入の増加という明治期の変改がうかがえる。そして，小伝馬町 2 丁目はこのセンターという特徴を示す。しかし，経営規模からすれば，やはり大店は A 地区の方が多いといえるのであった。